

反パーフェクショニズムの旗のもとに ——私と『社研月報』——

経済学部 望月清司

私などにスピーチの番がくるとは思ってもいませんでしたので、皆さんの楽しいお話を気楽にエンジョイしていただけて、急に何かしゃべれと言われてとまどうのですが、古くもない思い出のなかでは、社研の前身である「日本資本主義構造研究会」時代、中村（秀一郎）さんが例の中堅企業論を提起した研究会の雰囲気は今でも非常に鮮明に残っています。といいますのは、当時のならわしでは、研究会での報告者のレポートを『構造研月報』に掲載するだけでなく、その研究会での質疑応答、今後の課題などを当番がまとめてその同じ号にのせることになっていたのですが、中村報告があった研究会——ええと、あれは1959年か60年の初夏でしたか——での当番が私に廻ってきたからでした。卓上テープレコーダーが研究会の貴重な財産だったという時代でした。日本資本主義の「二重構造」ということがやかましく言われていたときですから、その二重構造の中間に第三のカテゴリーをさしはさもうという中村報告はたいへん活潑な論議をよびました。中堅企業の革新的リーダーたちを動かしているのは必ずしも第一義的に利潤動機ではないと力説する中村さんに、山田（盛太郎）先生が「それでもやはり資本主義ですからね」と例の荘重なご口調で語られた光景を思い出します。あとでテープを何度も聞き直して、そのやりとりをまとめるのに苦労しました。

あのころの構造研にくらべて社研が質的にも量的にも大いに発展したことはご同慶にたえません。とはいえ、あのころの何回かの研究会の情景を断片的に思い浮かべますと、やはり研究所は同時にまた研究会でなくてはならない、と思うこと切なるものがあります。図体が大きくなればなるほど、学際的な総合ということがだいじになるはずですし、じっさい構造研のあとをうけて経済学研究所ならぬ社会科学研究所を構想した首脳部の目ざしたところもそこにあったとは思いますが、このごろ、ある包括的なテーマを核として、それぞれが自分の専門の立場からアマチュア的意見を交しあうという「ゲゼルシャフト」的会合の機会が少なくなったように思うのは私だけでしょうか。

もっとも、そういう学際的な総合がある研究活動として具体化するのには、日常ふだんの中で学際的なダベリングが営まれていてこそ可能なのでして、その意味でも法学部が神田に独立しているという機構は私たちの学問研究のありかたに大きなマイナスですし、また生田でもそうい

う、ちょっとしたおしゃべりのためのたまり場のような空間が欠けていることも無視できないように思えます。京大人文研の共同研究は有名ですが、そのリーダーであられる桑原（武夫）先生のお話しでは、人文研の用務員室をたまり場にしていともかわされていた知的会話が土台になっていたと、何かで読んだことがあります。そういう、一見ムダなひまつぶしと見える時間と空間の提供こそが研究所のじつは一番だいじな役割のひとつとこのごろとくに感じられてなりません。

さて、社研が発足して『社研月報』にころもがえしたかしないかというころ、私個人にとってはきわめて重大な意味をもつことが私の耳にとびこんできました。当時の神田校舎の五号館のかたすみに、私は昼間も全然日のささないまっくらな研究室を構えていたもので、それだけで目目をわるくしたのですけれど、ガラス一枚の仕切りをへだてた隣の部屋が江沢・故三島両先生、それに今はお二人とも外語大にゆかれた長（幸男）さん、山田（克巳）さんといういずれ劣らぬ会話魔たちの雑居房であったせいもあって、時ににぎやかなサロンと化したわけです。そんなある時、話の前後は全然記憶にないのが今もってふしぎですが、社研の初代事務局長だった長さんの、新たに発足する『社研月報』では「ともかくパーフェクシヨニズムはやめようじゃないの」という、例のオクターブの高い声がひびいてきました。「パーフェクシヨニズム」という聞き慣れない英語のせいもあると思いますけれど、このことばは今でも私の耳にやきついています。実は当時、ひそかに『資本家の生産に先行する諸形態』の勉強をしているうち、そのころでは『諸形態』研究の絶対的なサブ・テキストとされていた大塚（久雄）先生の『共同体の基礎理論』にそれこそ根本的な全面的な疑問をもちはじめていたのです。当時の状況では、『基礎理論』をそんなふうにはしか読めないのはこっちの頭が悪いのだろうと思っておくのが安全でしたが、私の内部でその疑問がどんどんふくれ上って胸もとまでふきこぼれそうになっていたことも事実でした。

社研発足とほとんど同時に、小林（良正）先生を中心に、加藤幸三郎さんや法学部の林毅さん（現・阪大）と私の4人で『諸形態』輪読会をはじめていた矢先でもあり、私は長さんの「パーフェクシヨニズムはよそう」という宣言にはげまされ、ほんとうに目をつむって一歩ふみ出すという心境で、『諸形態』についての覚え書を『月報』編集部に提出したのです。今とちがって粗末な紙に刷り上った第4号の字づらを追いながら、「とうとう書いてしまった」、もうあともどりはできないかな、という感慨をいただいたことは忘れぬ思い出です。ドイツ経済史という本来の研究課題からだいぶ離れてしまっていますが、今の私のマルクス研究は、まったくあの五号館のガラス越しに聞いた長さんのひとことから出発したものにほかなりません。

長さんご自身は多分そんな発言をされたことなどっくにお忘れになっておられるでしょうし、まして、何げないご自分のひとことが隣室にいた私の胸ぐらをつかんで激しくゆきぶったことなど夢にも思っていらっしゃらないと思うのですが、ことはまったくそのとおりなのです。たいへんおくれればせながらこの席から長さんに心からのお礼を申し上げる次第です(笑)。

誰に読まれなくともいい、今の心のたけを文字に対象化して、その自分とひとり対して難問への新たな突破口を見つける手だてとしよう。そんな私のわがままを『月報』はよく聞いてくれ、そして私の知らない間に何人かの人々のところへ私のつぶやきを確実に届けてくれました。小林先生を中心とする楽しい『諸形態』輪読会に、ささやかな素材を提供して、その輪を多少とも前に進める役割をつとめた、このことについても私は『月報』に感謝しなくてはなりません。

その『月報』も百号をずっと前にこえ、そして『月報』では納まりきれぬエネルギーを収容する『年報』も7号を閲しています。ねがわくは、『月報』や『年報』が、出さないと予算を消化できないから出さねばならないものになることなく、いつまでもパーフェクシヨニズム反対の旗を高くかかげることで、所員各位それぞれの一步ふみ出しのスプリング・ボードとして働らくよう、そのことで日本の社会科学研究にたえず問題提起をかさねてゆく、そんなペリオディカルでありつづけることを願ってやみません。

まだまだこれからも『月報』のお世話になるつもりでおります。ここまで『月報』を支えてきたかたがたの縁の下の力持ち的なご尽力に深く思いをいたしながら、私もまた応分のパートをになうことで、社研の次の記念パーティまでの時を皆さんと共同にわから合いたいと思います。

「神話時代」の社研と私

真 保 潤一郎

本日はお招きを受けましてありがとうございます。先きほどの方と同様、所外研究員ですが、年報、月報など頂戴致し恐縮に存じております。

御列席の長先生が事務局長でしたか、夜分お電話を頂き、お受けした次第です。

司会者先生が再発足以前の研究所(社会科学研究所の略語、以下同じ)を「神話時代」とお